

Title	<書評>リチャード・ルビンジャー著『私塾』
Author(s)	加地, 伸行
Citation	中国研究集刊. 1984, 1, p. 38-41
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/61013
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

書評 リチャード・ルビンジャー著『私塾』

加地伸行

英文季刊誌『ジャパン・クォーターリー』一九八三年冬季号（朝日新聞社・第三十卷四号）において、私は、リチャード・ルビンジャー氏の著書『私塾』について書評した。それは、私の日本語を小野寺禎二氏が英訳したものである。しかし、枚数の制約があったため、十分な意図を伝えることができなかったので、ここに原文に修改と補充とを行なって再書評することとする。また、その相違を示すために、小野寺氏の英訳（原書評）も併載しておく。なお、英訳前の原日本語は、英訳しやすいような日本語に書いたため、欧文的な感じとならざるをえなかった。併載の関係上、原書評相当分の日本語は、日本語らしい日本語にあえて修正しないでおいた。

× × ×

本書は、日本の江戸時代の私塾についての研究である。著者は、現在、ハワイ大学日本学科学助教授である。

著者は、かつて日本に留学し、多くの力量ある日本人研究の

指導を受けた。だから、使用文献の選択において、ほぼ誤りがなく、研究書としての水準に達している。しかし、内容的には、日本人の論文を収集し整理することが大半であり、自己の見解はあまりなく、いわゆる概説書の形態をとっている。これは、外国人の日本研究書としてよくある形のものである。

本書の構成について言えば、著者は、私塾を学習目的によって儒学・蘭学（洋学）・国学などの分野の塾にわけ、そして、その各分野において、代表的な塾の例を挙げ、時代順に並べて考察している。

その結果、著者はつぎのように主張する。江戸時代、藩には藩校があったが、庶民や下級武士とは関係が少なかった。そのため、彼らは私塾で勉強した。さらには遊学して、他の土地の有名な私塾に入学した。この遊学によって、各地のいろいろな人物と知りあいになり、また、考えかたも自由になった。江戸時代末期、この遊学は非常に盛んであった。そのため、有

能な新人の登場を可能にし、また全国的に交流が行なわれるようになった。特に下級武士は、この遊学によって、自由に学び、自由な考えを持つようになり、やがて、この下級武士の中から、指導者が多く生れ、明治維新の原動力となった。ここから近代日本の発展が始まる、と。

一般に、欧米人が日本研究を行なう目的の一つは、日本が明治維新に成功し、その後、驚異的な発展を遂げた原因は何であるのか、それを探ろうとすることである。本書もまた同じ観点であり、それを教育の面において探ろうとしており、その先駆者である R. Dore 教授の "Education in Tokugawa Japan" の成果を継承的に展開しようとしている。こうした観点は、一般に、われわれ日本人自身の研究には、あまりない。

本書の特色を挙げるならば、著者は多くの日本語文献を丹念に読み、それを計量化して、自己の主張の論拠としている。たとえば、塾の学生の出身地を調査し、出身者の数を出身地の地図の上に記し、時代が下るにつれて、その数も範囲もしだいに増えていることを示す。こうした数値によって、時間がたつにつれて遊学が広まっていったことの証拠としている。

その他、著者は実に多くの日本語文献を読んでおり、しかもそれを生かして自己の着実な論拠としていることは、敬意を表するに価する。本書によって、私は今まで知らなかった文献の存在を知り、教えられるところが多かった。著者の猛烈な勉強ぶりを伝える大著であることを認める。

しかし、いくつかの疑問がある。著者は遊学を江戸時代の特色としているが、江戸時代以前でも、そうしたことがあった。たとえば、平安時代や鎌倉時代において、僧侶は勉強や修行を目的として、かなり遠い土地の寺院に行っている。もっとも庶民（武士はそのころ地位が低く庶民の中に入れてよい）には、そういうことはなかった。日本には昔から遊学の習慣があったと思われるので、著者は、今後、江戸時代以前の遊学について検討すべきであろう。

また、著者が挙げて研究した代表的な塾の例は、必ずしも適切と言えない。たとえば、江戸中期から末期にかけて繁栄した大きな塾、大阪の懐徳堂こそ、代表的な塾の一つである。それを研究しないで、九州にあった小さな塾の咸宜園をなぜ研究対象とするのか、その十分な理由を示すべきである。

また、江戸時代、地方の有力な商人や豪農たちは、中央の著名な学者を招聘し、何日か宿泊して講義をしてもらったり、いっしょに詩作の会を開いたりしている。すなわち、学生が遊学して他の土地へ勉強に行くことと逆に、中央の学者に講演を依頼して来てもらうということがあり、これが文化の全国的交流にたいへん影響を与えていたのである。このような点も今後研究すべきであろう。

また、日本語には、ひらかなという便利な表音文字があり、これを学習すれば、日本語のほとんどを表現することができる。このひらかなは学習しやすいことばであり、それがあったため、

江戸時代に庶民にまで文字学習が広まり、全体の教育水準が上がったのである。学習しにくい漢字しかない中国では、なかなか教育水準が上らないことを考えれば、日本においてひらかなの持つ重要な教育的意味を理解することができよう。だから、私塾が普及した背後に、学習容易なひらかなという日本語特有の性質があることをもっと掘りさげて検討すべきであろう。

なお、著者の日本語理解能力は、非常にすぐれており、また日本についての知識も豊富である。しかし、日本人の生活習慣などについて十分な説明を加えておかねば、日本の生活習慣を知らない欧米人読者に誤解を与えることになるだろう。たとえば、著者は塾の規則についてこう言う。

Among the more interesting warnings were: "Don't borrow otehr students' umbrellas, shoes, or clothes," "Take a bath every two or three days and more often in the summer," "Don't use futon (bedding) in the daytime unless sick."

日本人はかつて下駄という寸法が自由なはきものをはいていた。下駄はだれの足にでも合う。だから他人の下駄を借りることができたのである。欧米人の shoes の使用方法とまったく異なる。着物も同じである。また、日本は湿気の多い気候であり砂ぼこりがたちやすいので、不潔にならないように、よく風呂にはいる習慣がある。また、futon は朝起きると押し入れに収納し、ベッドのように人の目に触れる状態にしない。このような生活習慣に基いて、塾の規則が作られたのであり、日本

人にとっては当然の規則である。にもかかわらず、著者がこのような点に興味を抱くとすれば、図らずも、日本と欧米との文化の相違を意識していることになるだろう。

われわれ日本人が、欧米人の日本研究について抱く関心は、主としてこの点（日本と欧米との比較文化）にある。近代日本発展の原因探究という欧米人の研究視点について、われわれ日本人は、あまり関心を抱いていない。われわれ日本人は欧米との関係に、欧米人は日本という秘密にと、それぞれ違った関心を抱くというすれちがいがあるのだろうか。

両者それぞれの立場から言えば、このすれちがいはやむをえないものである。欧米人の日本研究が今後さらに深められてゆくならば、いつかはわれわれ日本人の関心と重なるようになるだろう。今は、欧米人の日本研究が始まったばかりであるから、本書のような、近代日本発展の原因探究という典型的な欧米人の日本研究が研究の主流となっているのだろう。そういう意味においてならば、本書は成功していると言えるよう。

× × ×
 本稿を再校中、岸田知子氏より、つぎのような御指教を得た。

『私塾』は、アメリカで原書が刊行される前に、石附実・海原徹両氏によって訳本がサイマル出版会から出版されている。また、その書評として、たとえば新堀通也氏のもの（昭和五七年五月十四日号「週刊ポスト」）がある。

私は、このような事情を知らず、昭和五十八年春、朝日新聞社より託された原書を読了して書評を書いた。

By Richard Rubinger

Princeton, N. J.: Princeton University Press. 1982. 250 pp. \$34.50

Western studies on Edo-period history almost invariably seek the key to the success of the Meiji Restroration and to Japan's subsequent modernization. "In *Private Academies of Tokugawa Japan*", Richard Rubinger finds that key in education. In this sense, his work builds on Ronald Dore's pioneer study, "Education in Tokugawa Japan." I must say that as a Japanese historian I find the Western preoccupation with this "key" somewhat tiresome.

Rubinger divides private schools according to their specialty, such as Chinese studies, Dutch studies and kokugaku, and examines chronologically what he considers representative examples of each type. He argues that because commoners and low-ranking samurai could rarely gain admission to clan schools, those who desired to study had no choice but to attend private schools. The more ambitious of those students left their own feudal domains to attend well-known institutions in other areas, mainly the large cities. In so doing, they came into contact with a variety of people, and in the process, became more liberal in their thinking. At the same time, the custom of studying outside one's domain led to the interchange of ideas on a nationwide scale, and brought competent persons into national prominence. The lower-ranking samurai, in particular, he says, benefited from the experience, eventually becoming the motive force behind the Meiji Restoration and the modernization of Japan.

Rubinger backs up his thesis with numerical data obtained through an exhaustive survey of the relevant Japanese literature. He shows, for instance, with maps pinpointing the birthplaces of schools' students how the custom of studying outside one's domain became increasingly common as the years passed. In its attention to documentation, Rubinger's study is impressive, indeed.

Although I agree for the most part with the author's statements a few points deserve comment. For one thing, he makes no mention of the fact that rich merchants and farmers in the provinces often invited well-known scholars to their homes, where the latter would lecture to, or compose poetry with, their hosts. Undoubtedly this custom, too, greatly promoted nationwide cultural exchange. In a sense it was a reverse flow from city to countryside. For another, he implies that the custom of persons traveling outside their domains to study is an Edo-period phenomenon; in fact, it predates the Edo-period considerably. In the Heian and Kamakura periods as well, Buddhist monks traveled great distances to study and train.

One can also sometimes take issue with the author's selection of representative schools. He does not, for instance, mention the Kaitokudō, which prospered in Osaka from the middle of the Edo-period and which is certainly a representative school. And why does he take up the Kangien, a small Kyushu school? He might have explained the criteria behind his choices.

The author should also have treated in more detail the role of the Japanese phonetic script hiragana in the diffusion of learning among the masses. In fact, one of the reasons the level of education in China was so slow to rise was the difficulty people had in learning Chinese characters. The development in Japan of the simple hiragana script contributed directly to the proliferation of private academies in the Edo period.

Academic works on Japan written by foreigners tend to be long on generalities. "Private Academies of Tokigawa Japan" is no exception. The views put forth in the book are predominantly those of Japanese scholars. But because Dr. Rubinger has read widely and wisely, his book is reliable and well worth reading.